

地域日本語ボランティアの言語調整の実態と課題 —地域日本語教室の「やさしい日本語」検証—

道本 ゆう子

キーワード：多文化共生、地域日本語教育、やさしい日本語、言語調整、ボランティア

1. はじめに

1.1. 本研究の背景－地域日本語教室とやさしい日本語－

日本に住む外国人数は、2018年末現在で273万1,093人となり過去最高となった(法務省2019)。また2019年4月には、改正出入国管理法が施行され、今後も日本に滞在する外国人の増加が予想される。

こういった社会情勢の中、多文化共生社会実現に向けて、「やさしい日本語」は各方面でますます注目されるようになり、地域の外国人の日本語習得を支援する地域日本語教室においても、コミュニケーションのメインツールとして「やさしい日本語」が当然のように推奨されるようになってきた。

本研究では、地域日本語教室を、池上(2007)にあるように「呼称は様々であっても、『地域在住の「外国人」に対して基礎的な日本語や生活情報を、地域住民が中心となってボランティアに支援する活動』」を行う場、そこに参加し、支援する地域の住民ボランティアを地域日本語ボランティア(以下、ボランティア)とし、このボランティアの言語調整の実態と課題を明らかにする。

地域日本語教室に関しては、その存在意義において、大学や日本語学校などの日本語教育機関とは一線を画し、日本語教育(学習)の場としてよりも、居場所、相互学習、異文化理解、社会参加などの理念とともに、「一方の「教授型」から「対話」による双方向の「交流型」を目指す」(米勢2010)場としての重要性が高まっている。一方で、地域日本語教室のこの理念重視の流れに対しては、青木(2011)の、教室活動が「日本語だけで行われると、母語話者と非母語話者の力の不均衡が避けがたく表面化する」「第二言語ユー

ザーの側の日本語を学びたいという緊急のニーズは犠牲にされることが多い」といった問題提起や、ヤン（2012）による「日本語能力の育成を期待している」国や定住外国人側と、「相互理解や社会参加」に重きを置く日本語教育側の間に「ズレが生じている」といった指摘もなされている。しかしながら、萬浪（2016）にあるように、現場レベルでは、外国人とボランティアの「対話」「交流」から「学習支援」と「相互理解」の両立を目指す実践活動も各地で試みられており、そういった実践活動の現場で「やさしい日本語」が、どう使用され、どう機能しているか、検証の必要性がますます高まっている。

1.2. 本研究の目的

筆者は2016年9月から2019年3月まで、熊本市国際交流振興事業団が主催団体として採択された文化庁「地域日本語教室スタートアッププログラム」（教室名：「東区にほんごクラブ」）にてコーディネイターを務め、ボランティアに対する「やさしい日本語」講座の講師を複数回に渡って担当した。そして、講座および現場での実践を通して、地域住民が「やさしい日本語」を使って、どのように自分の発話に調整を加えているか、調査、研究せねばならないという社会的責任を感じるようになった。

上述したとおり、近年、地域日本語教室では、外国人・ボランティア間での「やさしい日本語」を活用したコミュニケーションが求められ、そのボランティア養成や講座等で、「やさしい日本語」講座が基本パックのごとく組み込まれるようになった。事実、俵山ら（2016）の報告では、2008年度とそれから5年後の2013年度に全国各地の地域日本語教室で、どのような講座内容のボランティア養成・研修が行われたかを調査・比較した結果、「やさしい日本語」およびそれに関連する「外国人とのコミュニケーション方法」講座が2008年に比べて2013年には、「やさしい日本語」は2講座から9講座へ、「外国人とのコミュニケーション方法」は3講座から7講座へと増加しており、この5年間で、対話のツールとしての日本語＝「やさしい日本語」が地域日本語教室で求められるようになったことが指摘されている。

庵（2019）は、在住外国人と一般の地域住民との間の「やさしい日本語」では技術的なことを意識する必要はなく「重要なのは、相手が何を言おうとしているのかを理解し、自分が相手に何を伝えたいのかを常に意識しながら

日本語表現を書き換えたり言い換えたりすること」(下線筆者)、つまり相手を「お互いさま」の気持ちで思いやる「考え方(マインド)」が重要だとした。しかし、地域日本語教室の現場で筆者は、「相手が何を言おうとしているのかを理解し、自分が相手に何を伝えたいのかを常に意識」するというのが、ボランティアにとって非常に難易度が高いということを日々目の当たりにしている。

相手を思いやるマインドを多分に持ち合わせていると思われるボランティアであっても、地域日本語教室の現場でコミュニケーションの停滞や齟齬、破綻を引き起こしてしまい、結果として外国人参加者を失望させてしまうことがある。これは一体、何が原因となっているのだろうか。どうしたらこの問題が解決できるのであろうか。

本研究では、まずこの問題の原因を探り解決を目指すべく、地域日本語教室の現場の実態を「やさしい日本語」の視点から分析し、ボランティアの教室内言語調整状況とコミュニケーションを考察する。そして、考察の結果導いた方策が、地域日本語教室の場のみならず、地域全体における「やさしい日本語」の担い手の育成および多文化共生社会の実現に向けての一助となることを目的としたい。

2. 先行研究

2.1. 双方向コミュニケーションとしての「やさしい日本語」研究

「やさしい日本語」は、佐藤(2004,2007)ら弘前大学社会言語学研究室の“減災”のための「やさしい日本語」研究、並びに公文書の書き換えをはじめとした、庵・イ・森ら(2013)による“平時”における「やさしい日本語」研究がメインストリームとなり、研究、普及、活用が続けられている。

こういった中、尾崎(2013)は、「やさしい日本語」の議論の前提として、外国人に対するコミュニケーションを「コミュニケーションの領域・媒体・方向性」から分類した(表1)。

表1 コミュニケーションの領域・媒体・方向性(尾崎 2013)

領域	媒体	方向性	
		双方向(相互行為)	一方向(受容・産出)
私的領域	音声	聞く+話す (例:おしゃべり)	聞く(例:テレビ・ラジオ) 話す(例:留守番電話)
	文字	読む+書く (例:即時メール交換)	読む(例:新聞・雑誌・インターネット) 書く(例:伝言メモ)

公的 領域	音声	聞く+話す (例：仕事の相談)	聞く (例：緊急地震速報) 話す (例：商品説明)
	文字	読む+書く (例：仕事のメール交換)	読む (例：市のお知らせ) 書く (例：業務日報)

その上で、これまでの「やさしい日本語」の議論は、発信前に内容が画定している情報をいかにわかりやすくできるかという一方向のコミュニケーションに焦点を当ててきたと述べ、双方向のコミュニケーションについては「相手の外国人の日本語のレベルを考えつつ、その場その場で「やさしい日本語」を考えることになる」とし、「やさしい日本語」は現場でのコミュニケーションの中で生み出されるべきと主張している。この考えは岡崎(2002)の「共生日本語」に通底する。岡崎は「共生日本語」を「母語話者と非母語話者の間で交わされるやり取りを通して場所的に創造されていく日本語である」と提示した。

上記の考えをもとに、私的領域での双方コミュニケーション研究として、横内(2015)は、地域日本語教室を対象とした「やさしい日本語」のための実践活動を報告している。横内は地域で実際に日本人と外国人とが協働して「やさしくない日本語」を探っていく活動を通して、「地域のやさしい日本語」を作り出す対話型活動を行った。そこで得た参加者の気づきと講座後の活動の変化から、当該活動を有用な機会だったとして評している。

対して、公的領域の双方コミュニケーション事例として、柳田(2019)は、自身が行う地方自治体職員対象の「やさしい日本語」研修プログラムの内容をあげている。研修では、その理念や有効性に始まり、「やさしい日本語」の書き換えや、話し方や聴き方の練習も行われている。表2は、柳田による受講者向けの話し方、聞き方のポイントである。

表2 やさしい話し方・聴き方のポイント (柳田 2019)

やさしい話し方	やさしい聴き方
① 文を短く、終わりを明確にする	① あいづちをたくさん打つ
② 理解しているかどうか確認する	② 相手の話を理解したことをはっきり示す。
③ やさしい言葉に言い換える	③ 繰り返し、確認する
	④ 相手が困っていたら、積極的に助ける

2.2. 先行研究から見える課題

野田(2014)は「やさしい日本語」は母語話者が非母語話者に対して使う

日本語の問題であると提起し、言語面だけに焦点があてられがちな「やさしい日本語」が「ユニバーサルな日本語コミュニケーション」になるように意識すべきであり、そのためにどうしたらそれが実現できるか調査・研究をする必要があると述べた。また、庵(2019)は「やさしい日本語」の側面を言語的マイノリティ、マジョリティと対象ごとに関し、重要性、必要性を提示し、その中で、言語的マイノリティへの言語保障としての「やさしい日本語」の一つの側面として、地域における在住外国人と日本人の共通言語には、外国人に合わせて日本人が自らの日本語に一定の調整を加えた「やさしい日本語」しかかなり得ないと述べている。

尾崎(2013)は地域の共通言語を育む場の一つである地域日本語教室におけるボランティアに見られる問題として、「相手の外国人がわかっているか気にせず、話し続ける」「外国人に質問して、答えが待ちきれず話してしまう」などを挙げ、ボランティアが自分自身の日本語とコミュニケーションの仕方を見直すべきとしている。さらに、「すべての日本人が「やさしい日本語」を学び、多文化共生について考えるようになれば、共生社会の実現に一步近づくことになる」と提言している。

これらの主張の通り、「やさしい日本語」は多文化共生社会において有効性の高い、さらに言えば唯一の共通言語として考えられているにも関わらず、実際に地域社会での実証的な「やさしい日本語」研究はまだ十分であるとは言えない。坂内(2013)は、2013年時点で「やさしい日本語」の効果検証は留学生対象のみのもので、生活者を対象とした検証は行われていないと指摘している。その理由として、「現場が制度的保証、学術的保証などを待ってられないということではないだろうか」と推測し、「「やさしい日本語」が多文化共生社会で有効なツールに育つためには、これからが正念場である」としている。

筆者自身も多文化共生社会における「やさしい日本語」の有効性、可能性を信じている一人である。しかしながら、実践の現場では、地域のボランティアにとって、「やさしい日本語」が決して扱いが簡単なものではなく、また養成講座や研修を受けたとしても、すぐに使えるようになるものでもないということを痛感している。だからこそ、本研究では、この可能性と現実の狭間で、地域日本語教室における「やさしい日本語」使用の実態を調査、分析し、その可能性、課題を検証したい。

3. 調査について

3.1. 調査対象

本研究では筆者がコーディネイターとして携わった「東区にほんごくらぶ」に参加しているボランティア6名を調査対象とし、同くらぶにおける彼らと外国人6名との発話内容及びコミュニケーションを分析対象とした。

3.2. 「東区にほんごくらぶ」とは

3.2.1. 教室ビジョン

「東区にほんごくらぶ」は2016年の熊本地震をきっかけに、2017年6月に開設された熊本市東区の地域日本語教室である。その教室ビジョンとして熊本地震を教訓に「外国人を含め誰一人置き去りにしない地域づくりの拠点となる日本語教室」ということが明示された。

3.2.2. 教室運営

開催は地域の公民館にて、毎月第一、第三日曜日10時から11時半までの1時間半。活動内容は、毎回地域の外国人、日本人に身近なテーマを設け、テーマに沿って、ワークシートに話したいこと、聞きたいことを書いて準備し、その後ワークシート及び写真等を使用し対話を行うプレ・イン(プレゼンテーション&インタビュー)活動という手法を採用している。この手法は、外国人に発話機会、発話量を十分に持ってもらうことを目的とし、時間を区切って対話のメンバーを交替し、繰り返しプレゼンテーションを行うことで、日本語力の向上を目指している。メインの教室活動であるプレ・イン活動のほかにも、教室外活動として、初詣や防災センター見学、各国料理教室などの交流活動を積極的に行っている。

3.2.3. ボランティアについて

「東区にほんごくらぶ」で活動するボランティアは、「日本語交流サポーター」という呼称で募集をかけた。ボランティアに担ってもらいたい役割を「居場所を共有する地域住民」とし、その活動は「交流」であることを明言した。募集の際の説明会、養成講座においても、本教室のビジョンと交流メインの活動であることを明確にし、応募者とのミスマッチを防ぐのと同時に、体系

的に日本語を教えることを求めていることを繰り返し伝え、地域住民の参加の心理的ハードルを上げないように努めた。教室開設前のボランティア養成においては、①「外国語としての日本語」講座、②「やさしい日本語」講座を行い、その後、実際に外国人と交流する③実践講座も行った（表3）。

表3 ボランティア養成講座の内容

①「外国語としての日本語」講座	②「やさしい日本語」講座	③実践講座
座学形式で以下について講義 ・外国人にとって日本語の何が難しいか(音声、文法、表記など) ・どんな間違いをしやすいか ・外国人は日本語をどう学んでいるか	座学とワークショップ ・やさしい日本語のこれまで ・やさしい日本語を使う時のポイント ・「やさしくない日本語」とは ・書き換え・言い換えワークショップ	「日本文化体験デー」の開催 外国人が様々な日本文化(茶道、書道、着付け、折り紙など)を体験する手伝いをしながら、①②の講座で学んだことを実践する。

活動予定ボランティア全員に、養成講座すべての講座を受講することを必須とした。また、教室開設以降は、毎回、活動後に、自身の活動を振り返るために、その日の感想や、活動で工夫した点、コミュニケーション手法をボランティア間でシェアする時間を設け、さらに「やさしい日本語」使用状況を入れ込んだチェックリスト方式の振り返りシートを各自に記入してもらうようにした。

3.3. 調査の概要

本調査では2018年10月から2019年3月の間に「東区にほんごくらぶ」における外国人と日本人ボランティアの対話活動を録音した。表4は、その概要である。録音は、6日間、9グループ（及びペア）に対して行った。アルファベットのGは外国人（延べ数11、実数6）、Vはボランティア（延べ数15、実数6）、Cは教室コーディネイター（3名、筆者含む）を表し、アルファベットと数字により個人を分別している。また、コーディネイターは活動中グループ間を巡回しているので、（ ）内に補助的に記している。尚、外国人参加者の日本語レベルは、筆者が録音データ並びに実際のコミュニケーションを観察して、レベル分けしたものである。

表4 対話活動一覧

対話 番号	月日	対話テーマ	外国人 参加者	日本語 (レベル)	ボランティア (コーディネーター)	録音 時間
1	10月21日	故郷の おいしい食べ物	G1	上級 (N1以上)	V1, V2, V3	20:22
2	11月18日	病気になったら	G2	初中級 (N3-4)	V1 (C1, C2)	29:37
			G3	上級 (N1以上)		
3	12月16日	12月1月の 過ごし方	G3	上級 (N1以上)	V1, V2, V4 (C3)	41:42
			G4	初級 (N4)		
4	1月20日	大事な人	G5	入門 (N5)	V1, V5 (C3)	25:58
5			G6	中級 (N2-3)	V1, V5 (C3)	13:41
6	2月3日	元気! 元気? 体調管理で やっていること	G5	入門 (N5)	V4	7:26
7			G6	中級 (N2-3)	V4	9:56
8	3月17日	好きな映画、本 ドラマ、音楽	G6	中級 (N2-3)	V5	21:43
9			G6	中級 (N2-3)	V6	22:33

「東区にほんごくらぶ」は参加者が少人数で規模の小さい教室であるが、様々なレベルの外国人が参加し、対話のテーマも毎回異なる内容で行っている。また、その日の参加人数に応じて、グループやペアを決めており、活動グループ（ペア）の固定化を避けている。準備、進行などは、参加したボランティアが順番に担当している。

4. 分析方法

4.1. データの文字化について

今回の調査では、読みやすさから漢字かなまじり表記で文字化を行った。文字化にあたっては、「基本的な文字化の原則 (BTSJ) 2015年改訂版」(宇佐美 2015) を参照した。本稿で使用した記号は表5の通りである。

表5 本稿で文字化に使用した記号 (宇佐美 2015 参照)

。	文末を示し、発話の終わりにつける
/	発話文が終了していないラインに示す
,	区切り、発話と発話の間の短い間
?	疑問文 (文末の場合は?)
…	文中、文末に関係なく言いよんだように聞こえるもの
[]	音声に現れない筆者の説明 (主に動作)

尚、話者の交替を発話の区切りとして、一単位とした。

4.2. 外国人とボランティアの発話回数、発話量の比較

地域日本語教室が対等な関係性を築く場を目指すのであれば、そこでやりとりされるコミュニケーションも対等なものであるべきである。地域日本語教室で頻繁に問題視される「ボランティアばかりが話し過ぎる」という発話の不均衡が生じているか、外国人とボランティアの発話回数と発話量の比較を行った。尚、発話量の計測にあたっては、句読点や記号を除いた、フィラーを含む漢字かな交じりの発話データの文字数を計測すると同時に、「やさしい日本語」支援システム「やんしす」(※注1)を使用して、発話の拍数を計測した。

4.3. データのコーディング分類項目とグループ分け

文字化した録音データを、以下分類項目に沿って発話単位でコーディングした。

4.3.1. 分類項目について

「やさしい日本語」に言及するとき、その「やさしさ」の基準は書き換え、すなわち文字による一方向コミュニケーションを主対象に、弘前大学社会言語学研究室『「やさしい日本語」作成のためのガイドライン』(2013)(以下、ガイドライン)がよく参照されている。しかし、本研究ではガイドラインを参照しながらも、分析の対象が双方向コミュニケーションであることから、そのままガイドラインに沿って分析することは適切ではないと判断し、ボランティアが「やさしい日本語」講座で提示された内容を実践でどう活かしているかを検証するために、以下の項目で分類を行った。

まず、ボランティア養成講座実施の際にガイドラインとともに参照した「やさしい日本語」を使っのコミュニケーションを目的に作成された地域日本語教室向け教材『にほんごこれだけ!』(庵監修,2010,2011)に掲げられている「おしゃべりを楽しく続けるためのコツ」を整理し、録音データから分類可能なものを項目とした(※注2)。その上で、筆者自身が行った「やさしい日本語」講座で提示(※注3)した「やさしい日本語」と、そこにつなげるために避けるべき「やさしくない日本語」の中で「にほんごこれだけ!」の項目にないものを追加した(表6)。

表6 データ分類項目

「おしゃべりを楽しく続けるためのコツ」「にほんごこれだけ!」より	分類項目
自分だけが話すすぎない	①話し過ぎ(48拍以上)
だまって、相手の話が終わるのを待つ	②待たない
あいづちをうったり、うなずいたりする	
相手の言った言葉を繰り返してみる	③繰り返し
間違っていたら、さりげなく直して繰り返してみる	④直して繰り返し
ゆっくり、はっきり、発音してみる	⑤発音
できるだけ、かんたんな言葉に言い換える	⑥言い換え(語彙)
短い文で言いなおす	⑥言い換え(短文)
いろいろな質問文を使ってみる	
質問しているのか、説明しているのか、はっきりさせる	⑦質問
文字を書いてみる/絵や数字を書いてみる	⑧絵・文字・数字
言葉以外の手段も使う/「比較」してみる/訳してみる	⑨その他非言語ツール
養成講座で提示した「やさしい日本語」	分類項目
語尾はなるべく「です・ます」	⑩です・ます
相手の理解の確認	⑪理解確認
養成講座で提示した「やさしくない日本語」	分類項目
敬語、および敬語表現	⑫敬語
熊本方言	⑬方言
やさしくない文法(受け身、使役、二重否定など)	⑭文法
語彙(漢語、カタカナ語、抽象表現、オノマトペ等)	⑮語彙
上記以外で追加した項目	
フィルター(えっと、あの、やっぱり、なんか、まあなど)	⑯フィルター

分類項目①「話し過ぎ」は抽出の基準としてガイドラインを参照し、1回の発話で48拍以上のものを対象とした。分類項目⑨「その他非言語ツール」は、言語以外のツール使用全般を想定し、『にほんごこれだけ!』項目「比較」(実物等を使用しての比較と解釈)や教室内でスマートフォン一択で行われている「訳してみる」もこの項目として分類した。それから、⑭「文法」、⑮「語彙」はN3レベル以上を目安に抽出し、日本語読解学習支援システム「リーディングちゅう太」(※注4)にてその難易度を確認した。

また、分析の過程で、分析前には想定していなかったボランティアの特筆すべきフィルターの多用、それからそういったフィルターがコミュニケーション上の大きな障壁となっていることを発見したので、分類項目として⑯「フィルター」を追加した。

4.3.2. 分類項目のグループ分け

項目を設定した後、各項目をコミュニケーションの種別から、言語情報、パラ言語情報、非言語情報の3つにグループ分けを行った(表7)。

表7 分類項目グループ分け

言語情報		パラ言語情報	非言語情報
①話し過ぎ	③繰り返し	⑤発音	⑧絵・文字・数字
②待たない	④直してくり返し		
⑫敬語	⑥言い換え（語彙・短い文）	⑯フィラー	⑨その他 非言語ツール
⑬方言	⑦質問		
⑭文法	⑩です・ます		
⑮語彙	⑪理解確認		

※太線枠に「やさしくない日本語」をまとめた

グループ分けをおこなった理由として、今後「やさしい日本語」が言語的側面の機能を越えた「ユニバーサルな日本語コミュニケーション」として転換していくために、異なるコミュニケーションカテゴリーごとに、項目比較をすることに意義があると考えたからである。とはいえ、本研究が音声データの分析という手法をとっていることもあり、データからよみとれる項目のほとんどが言語情報グループに分けられることとなった。

5. 発話ターン、発話量

5.1. 発話ターン

外国人とボランティア（部分的にコーディネイター）の発話ターンの回数を比較をしたところ、以下のようになった（表8）。

表8 発話ターン数と割合

対話番号	発話ターン数		発話ターン割合	
	外国人	ボランティア	外国人	ボランティア
2	126	178	41%	59%
6	28	30	48%	52%
7	53	56	49%	51%
8	119	119	50%	50%
9	133	135	50%	50%
1	119	240	33%	67%
4	110	252	30%	70%
5	109	182	37%	63%
3	126	351	26%	74%

発話ターンにおいては、ペアの場合はその割合がほぼ均等になった（対話2,6,7,8,9、但し対話2は後半コーディネイター2人が合流したので、外国人発話割合が減少した）。グループでの場合は全体における外国人の発話割合は減少するものの、グループの人数で割ると一人当たりのターンはほぼ均等

割りでもある（同 1,4,5）。しかし日本人の人数が多く、かつ外国人の日本語レベルが高くない場合には、対話のイニシアティブを終始日本人が握り続け、外国人の発話ターンが極端に減ってしまうケースもあった（同 3）。

このことから、「日本人ばかりが話しすぎる」原因としては、対話番号 3 のような例を除いては、外国人の発話の機会が不足しているというよりも、他の要因によって引き起こされていると考えられる。

5.2. 発話量

発話量においては、発話ターンとは異なり、外国人とボランティア（部分的にコーディネイター）の間で圧倒的な不均衡が見られた（表 9）。

表 9 発話量

対話番号	拍数			
	外国人	ボランティア	割合	
4	872	3976	18%	82%
6	161	1086	13%	87%
7	570	1782	24%	76%
5	2853	2123	57%	43%
8	2098	2158	49%	51%
1	1462	3902	27%	73%
2	1548	4653	25%	75%
3	2033	7517	21%	79%
9	1512	3169	32%	68%

発話量の不均衡は、外国人の日本語レベルが低い（G5）と、その傾向が強く表れる（対話 4,6）。しかし、ボランティアが自分の話をする事よりも、聴くことに焦点を当てることで（次節質問の項で後述）、外国人の発話を増やし、より多くの発話を外国人から引き出すことも可能であることが見て取れる（対話 7 と 5,8 の比較：いずれも G6 との対話）。

6. 言語情報

ここからはボランティアの発話に焦点を絞り分析する。

6.1. 「やさしくない日本語」の使用実態

ボランティアによる発話内の「やさしくない日本語」出現を計測したところ、ボランティアごとに発話における言語調整の傾向が表れた（表 10）。

表 10 「やさしくない日本語」の出現数

話者	話し過ぎ	待たない	敬語	方言	文法	語彙	計
V1	23	8	4	44	31	63	173
V2	5	1	-	-	-	16	22
V3	6	-	-	5	9	24	44
V4	36	4	-	3	10	49	102
V5	14	-	-	-	8	9	31
V6	7	-	-	-	2	3	12
計	91	13	4	52	60	164	384

V1は「やさしくない日本語」すべての項目が多数出現している。またV2やV5、V6は項目の半分のみ出現に留まっている。全員から複数以上現れた「話し過ぎ」「語彙」は、言語調整が難しい項目だと言えよう。

6.1.1.1. 話し過ぎ

V4以外のボランティアが一桁台の割合であるのに対して、V4は唯一20%を超える割合となり、突出して「話し過ぎ」の傾向が見られた(表11)。

表 11 全ターン中の「話し過ぎ」の割合

話者	V1	V2	V3	V4	V5	V6
割合	6%	2%	9%	21%	4%	5%

この項目の特徴的な発話例として、割合が最も高かったV4と低かったV2の自己紹介(ともに対話3)を表12にあげる。

表 12 ボランティアの自己紹介比較

話者	発話内容
V2	私は、【V2】といいます。私も【V1】さんと同じ、ここのボランティアが2年目です。外国に旅行に行くのと、外国の言葉を勉強するのが好きです。よろしくお願いします。
V4	私は、ええっと【V4】です。ええ、ここの、ええ、公民館の近くの【地名】っていうところに住んでいます。私もええ、一応、あのボランティアは、みなさんと一緒に2年目ですけど、なかなか忙しくて、あの、たまにしか来れません。で、ええ、私も、あの外国に行くのが好きで、今年の9月には、ええ、【地名】、1週間ぐらい行きました。はい、で、あの、なかなか、ねえ、あの、外国の方と接することができないので、あの、日曜日は、今から、はい、あの、みなさんと交流できて、楽しきたいと思います。よろしくお願いします。

V2の自己紹介が端的で簡潔なのに対して、V4のは冗長である印象が拭えない。語彙や文法の難易度からいうと、V2,V4に大きな差はないが、V4の

発話はフィラーの多用もあいまり、外国人に限らず、聞き手にとってわかりにくいものになってしまっている。

「いろいろ説明してあげねば」という責任感からだと推測されるが、冗長に話しすぎてしまい、結果外国人の理解を置き去りにしている発話が、前述したとおり他のボランティアにも複数回見受けられた。

6.1.2. 待たない

項目「待たない」はその出現回数は少なかった。発話内容を分析すると、全てにおいて、親切心で、外国人から出てこない言葉を代わりに言ってあげてしまうというケースであった。V1、V4にその傾向が表れている。

6.1.3. 敬語

坂内(2013)、柳田(2019)ともに、自治体等の窓口を想定し、日本人の会話における敬語表現の多さが「やさしい日本語」運用の障壁になることを懸念している。しかし、本調査においては、敬語の出現は極めて少なかった。V1にのみ複数回表れたが、これは1例を除いて、対外国人ではなく、グループの中の日本人に対して向けられている。公的領域である自治体窓口対応と異なり、私的領域である地域日本語教室の対話においては、ボランティアによる敬語の調整はうまく行われていると言えるだろう。

6.1.4. 方言

方言(熊本方言)は特定のボランティア(V1)に極めて顕著に見られたほか、V3、V4からも複数回出現した。これらの方言を、和田(2015)の分類をもとにボランティアごとに一覧化した(表13)。

表13 ボランティアの発話に見られた熊本方言

	否定 ～ん	音変化	文末 ～けん	語彙 だけん	アスペクト ～よる	文末疑問 ～と	文末伝聞 ～て	語彙 ぬくい	助詞 ば
V1	13	10	7	7	4	1	-	1	1
V3	4	-	1	-	-	-	-	-	-
V4	-	2	1	-	-	-	1	-	-
計	17	12	9	7	4	1	1	1	1

否定の「ん(未然形ない→ん)」が最も多く見られ、それから、音変化(促音便10、撥音便2)、文末の「けん」が続いた。言語調整が求められる地域

日本語教室でこれらの方言が出現するという事は、方言を方言として認識していない可能性、もしくはこれらへの言語調整弁が緩いことが推察される。特にV1は他のボランティアに比べて、方言の出現が顕著である。しかし、V1が発話内で方言を全く調整できないかという、そうではないことも本調査で判明した。日本語レベルが低いG5との対話4の直前に、筆者がV1に「G5は本当の日本語ビギナーなので、「やさしい日本語」を意識して使ってください」という注意喚起を行ったところ、方言を含めて、V1の言語調整がかなり「やさしい日本語」に向けて働いた。結果、対話4とその直後の対話5でのV1の方言使用回数は3回と他の対話よりも低い数値となった（V1の方言は対話1で9回、対話2で23回、対話3で6回出現）。このことはV1が方言を方言として認識していない可能性を否定している。

6.1.5. 文法

文法に関しては、会話的表現を中心に以下の内容であった（表14）。

表14 ボランティアの発話に見られた「やさしくない」文法項目（N3以上）

文法項目	ていうか	じゃない	縮約	わけ	つけ	だろう	受身	といたら
回数	18	8	7	4	4	4	3	2
1回のみ出現	たりする・に合わせて・から考えると・に比べれば・こと・らしい ともに・ず・～ことは～・てたまらない・として・による							

発話の中でN3以上の文法はそれほど多くは使われておらず、ボランティアがやさしく話そうと言語調整していることが窺える。

最も多かった「ていうか（というか、つ（う）か、てか）」は、ボランティアが自身の発話に自信がないときや言葉を選ぶ過程で出現した。これは、用法よりも、その音のバリエーションから外国人にとって時に理解が困難になると思われる。使用頻度とその難易度を考えたとき、この文法項目は地域の共通語として外国人、日本人双方への提示が必要である。また、「じゃない（推量・確認）」はボランティアが否定の「じゃない」と混同している可能性がある。こちらも頻度の高さと難易度（未然形+「じゃない」で二重否定となる）から双方への用法提示を検討する価値がある。それ以外も会話で多用される文法表現に関しては、共通語を作り上げるためにも、今後取り扱いを検討する必要がある。

6.1.6. 語彙

ボランティアの「やさしくない日本語」の中で、突出して多かったのが「語彙」である。日本語教師である筆者は、日常的に語彙のコントロールを行っているが故に、語彙の難易度判別が可能だが、そうでないボランティアにとって、養成講座で提示されたとはいえ、文書の書き換えなど推敲の余地があるものはまだしも、対話の中で相手に合わせて語彙の難易度を判別し調整するというのは、雲をつかむような作業なのかもしれない。以下は「やさしくない日本語」語彙の内容である（表 15）。

表 15 ボランティアの発話に見られた「やさしくない」語彙項目（N3 以上）

	固有 名詞	オノ マトペ	抽象 表現	カタカナ 語	漢語	専門 用語	動詞	その他 名詞	その他 副詞	その他 形容詞	計
V1	2	3	-	6	22	9	6	11	4	-	63
V2	-	4	-	2	3	-	2	5	-	-	16
V3	1	1	1	4	3	-	2	9	3	-	24
V4	3	1	6	3	6	1	11	15	2	1	49
V5	-	-	1	2	2	-	1	1	2	-	9
V6	-	-	-	1	1	-	1	-	-	-	3
計	6	9	8	18	37	10	23	41	11	1	164

項目別に見ていくと、その他名詞、漢語が多い。名詞に関して言えば、非言語ツールで提示可能なものが多いので、外国人の理解を確認しながら、ツールを使う頻度を高めていくことで補えるだろう。漢語においては、使用回数が多い V1 のようなボランティアには、その事実を指摘し内省を促すのと同時に、「漢語」という表現と多少の例示だけでは抽象的すぎて、ボランティアがそれを発話の中で意識するのは難易度が高いので、明示的で具体的な漢語の言い換え練習に教室全体として取り組むなどして、ボランティア及び教室の「やさしい日本語」ボキャブラリーを増やしていきたい。

6.2. 「やさしい日本語」使用の実態

ここからは、プラスのベクトルでの「やさしい日本語」の使用について見ていきたい。表 16 はその一覧と出現数である。

表 16 「やさしい日本語」使用・コミュニケーション状況

	繰り返し	直して 繰り返し	言い換え	質問	です ます	理解確認	計
V1	7	3	8	118	58	3	198
V2	-	-	8	33	80	4	125
V3	-	-	-	96	16	-	112
V4	4	1	-	8	14	-	27
V5	12	1	4	69	59	5	150
V6	2	2	7	6	41	-	58
計	25	7	27	330	268	12	682

数値から見ると「質問」と「です・ます」が桁違いに多いが、それ以外の項目でも着目すべき点が見られた。以下その詳細である。

6.2.1. 繰り返し・直して繰り返し

「繰り返し」・「直して繰り返し」の項目ではグループでの活動にのみ参加している V2、V3 が一度も行っていないことに注目する。繰り返しの機能を相手の発話に対する確認、理解提示と考えたとき、ペアの場合は、それをするのは唯一の相手であるボランティアとなる。一方、グループの場合、自分が理解、確認しなくても、誰かがわかれば大丈夫という心理が働き、その出現が見られにくくなると考える。

6.2.2. 言い換え

自分が話そうとすることを「やさしい日本語」に言い換えるとき、その言い換え作業は発話前に既に頭の中で終わっている。したがって、ここで分析の対象とできたのは、自分の発話したものの言い換えと、他のボランティアの発話の言い換えであった（表 17,18）。

表 17 自身の発話の言い換え

話者	発話内容
V1	これが、奥さん、嫁さん、, えっと、なんて言うかな、, 妻。
V6	うん、うん、ああ、じ、じよ、でん（ひらがなを書きながら）、自分のストーリーですね。

表 18 V2 による他のボランティア（V4）の発話の言い換え

話者	発話内容
V4	お屠蘇は、ねえ、えっと、おお、熊本では、ええ、赤酒ってね、お酒があるんですね、これが、あれで…。
V2	お酒を飲みます。みんなで。

V4	ハーブが入っての、つけて、しばらくして、あの、その赤酒の中に、お屠蘇の、袋の、なんか、薬草、入れて…/
V2	薬の入ったものを、入れて。

表 18 での V2 の言い換えによるフォローの様子から、言語調整がうまく機能していないボランティアであっても、グループでの活動であれば、別のボランティアによるフォローが受けられる余地があることがわかる。

また、言い換えの項目では「やさしい」方向ではなく、「やさしくない」方向への言い換えも見られた (表 19)。

表 19 「やさしくない日本語」への言い換え

話者	発話内容
V1	やっぱ、アルコールってのは、強いですか？
G1	アルコール？
V1	やっぱ、アルコールの度数っていうか、含有量っていうか…アルコールが入っている分、多いですか？

V1 はアルコールという日本語が理解できなかった G1 に対して、アルコールという語彙の言い換えをやさしい方向へを行うのではなく、より抽象度の高い語彙を用いて言い換えを行い、難易度を上げている。実はこういった「やさしくない日本語」への言い換えは、しばしば見受けられる。語彙の項目でも触れたが、ボランティアにとっては、何が外国人に「やさしい」のか判断するのが難しい。これを解決していくためには、現場で発現したこういった実例を蓄積していき、具体例とともに練習、実践を重ねていく必要がある。但し、方言の項目でも触れたが、直前に相手の日本語レベルとともに「やさしい日本語」使用を促すことで、同じ V1 は表 20 のように、相手の外国人の理解を探りながら、「やさしい」方向への言い換えも行っている。

表 20 V1 による「やさしい日本語」への言い換え

話者	発話内容
V1	だいたい、できましたか？
G5	ダイタイ？
V1	完成？
G5	カンセイ？
V1	終わりですか？
G5	・・・？
V1	終わりましたか？
G5	いいえ、ちょっと、まだ。

V1 は、意味が近い言葉の中から相手の反応を確認しながら、簡潔に一つずつ言葉を提示し、最終的に理解に導いている。このことは、相手のレベルや日本語の難易度を判断しながら言語調整するのは困難でも、レベルの提示を受け、注意喚起をされることで、試行しながら言語調整が行えることを示唆している。

6.2.3. 質問

この項目では、まず、全発話ターンにおける質問の割合を数値化し、次に質問の中で質問かどうかが明確なものを抽出して、その割合を出した。質問として明確にわかるものの抽出基準として、「ですか」「ますか」など文末に終助詞「か」がつく発話、及び語末が上昇イントネーションで難しい文法や語彙を使っていない短い発話を抽出した（表 21）。

表 21 質問数および発話におけるその割合・質問ということが明確な質問数、割合

話者	全質問数	発話における 質問割合	質問ということが明確	
			回数	割合
V1	96	24%	70	73%
V2	29	12%	27	93%
V3	8	12%	3	38%
V4	33	20%	13	39%
V5	118	37%	108	92%
V6	69	51%	64	93%
計	379	28%	285	75%

V6 は発話における質問割合が高いが、これは V6 がペアでの活動（対話 9）にのみ参加していることに起因していると考えられる。V5 もペアでの対話 8 のみ見ると、その数値が高く抜き出ている。しかし、ペア活動だからと言って、必ずしもこの割合が高くなるとは限らない（表 22）。

表 22 ペア活動における質問数・割合、質問ということが明確な質問数・割合

対話番号	話者	質問数	質問割合	質問ということが明確	
				回数	割合
2	V1	27	30%	9	33%
6	V4	14	47%	4	29%
7	V4	17	30%	8	47%
8	V5	55	46%	53	96%
9	V6	69	51%	64	93%

対話 8 と 9 の質問項目の数値の高さの背景には、3 月 17 日に行われた対

話 8,9 からさかのぼること約 2 か月、年明け頃より始まったボランティアの活動の優先順位を「話すこと」より「聴くこと」へ意識を向けるといったコーディネイターらによる促しがある。また、この流れの中でボランティア間でも「聴く」手法のシェアリングなども行われた。対話 8,9 は、そういった取り組みの効果が表れたと言える。

また、表 21 の V2 にも注目したい。V2 は質問の回数、割合こそ多くはないが、質問のわかりやすさの割合が V5、V6 同様極めて高い。これは、V2 が発話において、終始「です・ます」を意識した言語調整を行っており（次項後述）、質問の際もその調整が行われているからだと考えられる。

一方で、質問かどうかが不明瞭な質問も数多く見受けられた。最もわかりにくいのは、「やさしくない日本語」を多用して、一方的に話してからの急な質問である（表 23）。

表 23 質問としてわかりにくい発話

話者	発話内容
V1	だから、そう、いろいろ、ほら、あの、まず病院選ぶのに、例えば、胃なんかは消化器・・・あの、くだもんを食べると、消化器ったら、ずっと胃から小腸から大腸へ、その辺の病気は、内科、内科、内科で見てもらって、内科に行って、今言ったインタースコピオを入れたり・・・、そして検査するんですけど、あの、怪我とかなんとかだったら、外科とか、だから、そのこの、行く場所はわかりますか？。
V4	お客さんとね、ふれあいがね、あるからね、ええ、ええ、ええ、えええ、，，【地名】から、ええと、その、アパートから、そこまでは、ええ、何で行くの？ 交通機関？。

上記のほかにも、発話は短くても「やさしくない日本語」が入り込んでいる質問に対して、外国人は理解に窮しているようであった。質問に関しても、ボランティアには「わかりやすく質問をしましょう」という抽象的な訴求だけでは十分ではないので、具体的な例示とともに、質問スキルの向上を図る必要がある。

6.2.4. 「です・ます」

我々はおしゃべりや会話では、日常的に常体（普通体）で話すことが多く、また「です・ます」よりも、「んです」を使うことから、「です・ます」を使って対話活動を行うのは、実は難しく、かつ不自然に聞こえることも多い。ただ、外国人の視点に立つと、日本語のレベルが低い場合においては、「です・

ます」を使用することで理解が容易になることが多い。実際に、日本語ビギナーの G5 は常体や「んです」の発話には返答に時間がかかる、もしくは理解不可の様子が多々見られ、反対に「です・ます」の質問ではその逆のレスポンスが見られた。

こういった中、V2 はその発話内で高頻度で「です・ます」を使用して、「です・ます」出現数も発話におけるその割合も極めて高かった（表 24）。

表 24 「です・ます」の出現数と割合

	V1	V2	V3	V4	V5	V6	計
回数	61	102	16	17	64	51	311
割合	15%	44%	24%	10%	20%	38%	23%

V2 は自身の発話の 40% 以上で「です・ます」を使っており、対話 1 のように外国人の日本語レベルが非常に高い場合も始終「です・ます」で発話している。ということは、相手のレベルは問わず、「です・ます」を使用しており、相手に合わせて言語調整をしているというよりも、常にその調整度を最もやさしいレベルにチューニングしていると言える。

「やさしい日本語」がどんな日本語レベルの外国人との間でも共通言語として成立するためには、ボランティアの「です・ます」への言語調整スキルは大切な要件であろう。

6.2.5. 理解確認

外国人への理解確認は、想定していた以上に少なかった。またボランティアによって行うか否かが二分された。相手の理解に問題ない場合は行う必要がないが、相手の理解を確認しないが故の会話の齟齬や破綻も見られた。また、外国人側が「わからない」と伝えたり、そのサインを出したりしていても、それにボランティアが気づかないケースもあった（表 25）。

表 25 「わからない」サインにボランティアが気づけない対話

話者	発話内容
V4	えっと、生だから、炒めたり？。
G6	な、ま・・・？。
V4	生を切るでしょ。そして、それを、そのまま食べるの？。

V4 は G6 が明らかに上昇イントネーションで聞き返しているのを「わか

らない」のサインとして受け止ることができず、そのまま自分の質問を続けてしまった。V4は全体を通して、対話活動において相手が理解しているかどうかのモニタリングスキルが欠如していることが観察された。

7. パラ言語情報

次に、パラ言語（表 26）における分析結果について述べる。

表 26 パラ言語

回数	V1	V2	V3	V4	V5	V6	計
発音	1	-	-	-	1	-	2
フィラー	139	16	17	196	62	32	462

この結果は、調査前の想定と正反対のものであった。以下詳細を述べる。

7.1. 発音

発音項目はV1,V5ともに日本語レベルが低いG5との対話活動で、それぞれ1回ずつゆっくりはっきりと発話したのみであった。G5レベルの外国人とのコミュニケーションでは、発音が理解に大きく影響するので、事前の注意喚起以外にも、ボランティアが継続して意識できるようになるための取り組みを検討していく必要があると思われる。

7.2. フィラー

フィラーは本研究において、最も大きな発見であった項目である。今回フィラーの抽出はボランティアの発話から、①言い淀み、②それ自体は意味を持たない、③発話と発話の間を埋めるもの、の3点が揃ったものをボトムアップ方式で抽出した。表 27 は出現したフィラーとその回数である。

表 27 出現したフィラーの種類と回数

	なんか	えっと ええ	ほら	いや	まあ まっ	こう そう ああ	この その あの	やっぱ り	もう	ねえ	はい うん	その他	計
V1	20	6	3	8	5	7	55	22	8	3	1	1	139
V2	3	1	-	1	-	2	7	2	-	-	-	-	16
V3	9	-	-	1	1	-	1	4	-	-	1	-	17
V4	9	107	5	1	5	11	25	6	1	21	1	4	196
V5	2	7	3	4	5	4	28	7	2	-	-	-	62
V6	4	15	1	-	-	-	7	1	1	-	3	-	32
計	47	136	12	15	16	24	123	42	12	24	6	5	462

実は、フィラーについては養成講座や普通の振り返りでも直接的に触れたことがなかった。もちろん、はっきり、簡潔に話すことの重要性はどちらにおいても、繰り返し伝えてはいたが、フィラーそのものに注目することも言及することもなかったので、分析の過程でフィラーがコミュニケーション上たびたび大きな障壁となっていることを確認できたのは本研究の一つの成果である。

フィラーの表れ方はボランティアによって、傾向が異なるが、V4の「えっと・ええ」は看過できない出現数であり、このフィラーがコミュニケーションの妨げとなっていることがはっきり確認できた。ボランティア全体を見たときには、「あの」を始めとする「この、その、あの」が最も多く、どのボランティアからも出現が見られた。

フィラーが複数回表れる発話はいずれもボランティアが話の内容を考えながら話している発話であり、とりとめなく話している印象のものが多かった(表28)。

表28 フィラーの出現例

話者	発話内容
V3	通訳の方が一人だったんですけど、通訳さんも、なんか、よくわからなくて、なんか、しきたりも難しいでしょ。インドの正式な結婚式、やり方も。
V1	やっぱり、食事とか、なんとか、ねえ、やっぱりね、日本のと違ってね、あの、おなか痛くなったり、やっぱ、そういうときは、内科とかに？。
V4	ねえ、いいところでしょう？ ね、また、あっちで行って、また、ええ、韓国と、熊本の、なんか、ほら、ね、つながりがあったら、韓国と、ねえ、私はね、年に回、あの、ええ、イタリアの船だけど、あの、博多からね、日本の裏日本を、金沢とか行って、最後はブサン・・・。

フィラーがあるからわかりにくいという発話もあるが、考えがまとまらない中で話し出し、話者本人も自分が何をどのように話しているかわかっていない、主旨が不明瞭な発話にはフィラーが必然的に付随してしまっている。

フィラーそのものは、会話の中ではごく自然に発生するものなので、それ自体を「やさしくない日本語」として使用回避を訴える必要は全くないが、フィラーの多用、およびフィラーが出てしまう状態に注意を向けさせることで、自分の発話を俯瞰するきっかけとなり、結果的に「やさしい日本語」を意識することにつながると考えられる。したがって、今後は発話中のフィラーも「やさしい日本語」の中で取り扱う意義が十分にあると言える。

8. 非言語情報

非言語コミュニケーションの使用数は、以下のとおりである（表29）。

表29 非言語コミュニケーション回数

使用回数	V1	V2	V3	V4	V5	V6	計
絵・文字・数字	2	2	-	1	4	6	15
スマホ	2	7	-	-	6	3	18
計	4	9	0	1	10	9	33

使用が0のV3に関しては、参加した活動が日本語レベルが非常に高い外国人とのグループでの活動（対話1）のみだったので、その必要性がなかったと思われる。V4の1回という使用回数の少なさは、その要因を今後インタビュー等で検証を行いたい。それ以外のボランティアは、言語情報でうまくいかないときや「やさしくない日本語」を回避するために、非言語ツールを活用し、コミュニケーションをとっている。

9. 考察

本研究を通して明らかになったのは、ボランティアの「やさしい日本語」の使用すなわち言語調整は、個人差が大きく、ボランティアによってその調整の方向性、度合いは異なるが、言語調整自体は全体において行われているということである。これは、ひとえに「やさしい日本語」のベースとなる「マインド」が、これまでの養成講座や対話活動、振り返り活動を通して醸成されたからであろう。

では、「マインド」を持ち合わせている彼らが、「やさしくない日本語」も多用しているこの現状は、何が引き起こしているのか。筆者はその要因の一つをモニタリングスキルの不足と考える。まず、①相手が理解しているかどうかのモニタリング、そして②自分の発話が相手に「やさしい」かどうかのモニタリング、この2つの不足が大きく影響しているのではないだろうか。

相手のレベルに合わせて自身の発話を調整するには、まず相手のレベルと理解度を判断する必要がある。しかし、上記スキルが活きなければ、その判断は難しく、言語調整も困難となる。但し、分析でも触れたように、事前に相手のレベルの提示を第三者から受けたり、活動における優先順位を提示されることで、この問題は回避することも可能である。また、モニタリングスキルの不足はボランティア間で協力する（外国人との1対1の活動を避ける）

ことでも、補えることがわかった。モニタリングスキルを高めることは、それがそのまま言語調整能力の向上につながると考えられるので、中長期的にそこに取り組むと同時に、短期的には、こういった回避策などを用いて、より実のある教室活動が行われるべきである。

それから、多くのボランティアにとって、抽象度の高い表現での「やさしい日本語」提示では、実践に落ちにくいことも研究を通して明白になった。

「はっきり話す」といった提示では、フィラーへの意識につながらないし、「漢語は難しい」では、漢語という概念と自分の日常的な発話の中の漢語が結びつかない。したがって、ボランティアには抽象的な説明に加えて、可能な限り具体的、明示的な提示が必要である。今回の研究では見受けられなかったが、地域住民の中には恐らく「敬語や方言はわかりにくい」といっても、何が敬語で何が方言かわからない人もいるのではないかと考えられる。このように、地域への具体的かつ実践的な提示をするには、やはり現場の実態調査、検証が重要である。

10. 今後の課題

これまで、「やさしい日本語」講座や研修は、外国人をはじめとした言語的マイノリティに対しての「やさしさ」にフォーカスした先行研究等を基にトップダウン方式で行われてきたが、今後は本研究で見てきたように、言語的マジョリティである日本人の現場での具体的な問題や課題にも注目し、ボトムアップ方式のアプローチも組み込まれる必要がある。なぜなら、地域の「やさしい日本語」の担い手は現場で実践を行う人々であり、彼らの抱える問題や課題を見ることなくして、「やさしい日本語」が地域の共通言語になりえるはずもなく、「やさしい日本語」を地域の共通語として成立させるには、これまでのトップダウン方式と今後のボトムアップ方式双方向から各地域の「やさしい日本語」を探るべきであるからだ。それには、ボトムアップで問題提起や課題設定ができるように、現場の実態や課題をしっかりと把握することが急務である。

また、我々「やさしい日本語」の担い手の養成者は、養成の順序として、まずはベースとなる「マインド」の醸成、その上でコミュニケーション、さらにその中に「やさしい日本語」があることを提示すべきであり、養成の効果や養成後の変化まで見届けることがもっと求められるべきである。

本研究では、一地域日本語教室をその研究対象としたが、今後はほかの地域の教室や領域が違う、例えば自治体窓口等にもその対象を挙げたいと考えている。また、研究対象の拡大と並行して、「やさしい日本語」がボランティア以外の地域の人々にも、「学びたい」と思われるような、言い換えれば地域の生涯学習の一つとして認知されるような学習モデルの設計も必要である。

【注】

※注1：やさしい日本語支援システム「やんしす <http://www.spcom.ecei.tohoku.ac.jp/~aito/YANSIS/>（閲覧日：2019年6月20日）

※注2：『にほんごこれだけ！』1,2（庵功雄（監修）（2010,2011）森篤嗣・岩田一成編集 ココ出版）の「おしゃべりを楽しく続けるためのコツ」には4つのポイントが提示されており、ポイントごとにカテゴリーテーマが定められている。うち、ポイント1は「心構え」というカテゴリーで録音データから分析不可能だったので分析対象から外した。また、ポイント2「聞き上手になること」カテゴリーの「あいづちやうなずき」は、音声データから抽出できるものとそうでないものがあるので、公平さの観点から除外したが、活動の現場でも録音データでも頻度の高いあいづちやうなずきを確認することができる。

※注3「東区にほんごくらぶ」日本語交流サポーター養成講座「やさしい日本語」講座にて具体的に提示した内容

「やさしい日本語」を使う時のポイント	「やさしくない日本語」とは
<ul style="list-style-type: none"> ・伝えたいことを簡潔に（はっきり、短く） ・終わりがわかるように（です・ます） ・相手の理解を確認する 	敬語・方言・オノマトペ・カタカナ語・文法・ 俗語・抽象表現・縮約形 ※すべて例示をしながら

講座にあたり参照した資料

- ・弘前大学社会言語学研究室（2013）『増補版「やさしい日本語」作成のためのガイドライン』<http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/kokugo/ejgaidorain.html>（閲覧日：2019年6月20日）
- ・庵功雄（監修）（2010）森篤嗣・岩田一成編集『にほんごこれだけ！』1 ココ出版
- ・庵功雄（監修）（2011）森篤嗣・岩田一成編集『にほんごこれだけ！』2 ココ出版
- ・愛知県（2013）『「やさしい日本語」の手引き』愛知県地域振興部国際課多文化共生推進室

※注4 日本語読解学習支援システム「リーディングちゅう太」<http://language.tiu.ac.jp/index.html>（閲覧日：2019年6月20日）

【参考文献・資料】

- 青木直子 (2011) 「在日外国人の日本語学習支援ツール「日本語ポートフォリオ」を媒介とした支援者の学び」『平成 20 年度～平成 22 年度科学研究費補助金研究成果報告書』基盤研究 (C) 課題番号 20520466
- 庵功雄・イヨンスク・森篤篤嗣 (編) (2013) 『「やさしい日本語」は何を目指すか』ココ出版
- 庵功雄 (2019) 「マインドとしての〈やさしい日本語〉」庵功雄・岩田一成・佐藤琢三・柳田直美 (編) 『「やさしい日本語」と多文化共生』第 1 章, pp.1-21. ココ出版
- 池上摩希子 (2007) 「「地域日本語教育」という課題 -- 理念から内容と方法へ向けて」『早稲田大学日本語教育研究センター紀要』20, pp.105-117. 早稲田大学日本語教育研究センター
- 宇佐美まゆみ (2015) 『基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese:BTSJ) 2015 年改訂版』<https://ninjal-usamilab.info/pdf/btsj/btsj2015.pdf> (閲覧日: 2019 年 6 月 10 日)
- 岡崎眸 (2002) 「内容重視の日本語教育—多言語多文化共生社会における日本語教育の視点から—」岡崎眸 (編) 科学研究費補助金研究成果報告書『内省モデルにも基づく日本語教育実習理論の構築』pp.322-339 <http://www.dc.ocha.ac.jp/comparative-cultures/jle/Okazaki/naiyoo-juushi.html> (閲覧日: 2019 年 6 月 8 日)
- 尾崎明人 (2013) 「「やさしい日本語」で作る地域社会」庵功雄・イヨンスク・森篤篤嗣 (編) 『「やさしい日本語」は何を目指すか』第 1 部第 4 章, pp.59-77. ココ出版、
- 坂内泰子 (2013) 「「やさしい日本語」の普及をめぐる」『神奈川県立国際言語文化アカデミア紀要』2, pp.65-74. 神奈川県立国際言語文化アカデミア
- 佐藤和之 (2004) 「災害時の言語表現を考える」『日本語学』23 (8), pp.34-45. 明治書院
- 佐藤和之 (2007) 「被災地の 72 時間—外国人への災害情報を「やさしい日本語」で伝える理由」『「やさしい日本語」が外国人の命を救う』, pp.9-27. 「やさしい日本語」研究会
- 俵山雄司・渡部真由美・田中真寿美 (2016) 「地域日本語教育におけるボランティアの養成・研修講座の内容の変遷: 文化庁事業の平成 20 年度と平成 25 年度の取組の比較を通して」『名古屋大学日本語・日本文化論集』24, pp.45-59. 名古屋大学国際言語センター
- 野田尚史 (2014) 「「やさしい日本語」から「ユニバーサルな日本語コミュニケーション」へ—母語話者が日本語を使うときの問題として—」『日本語教育』158, pp.4-18. 日本語教育学会
- 弘前大学社会言語学研究室 (2013) 『増補版「やさしい日本語」作成のためのガイドライン』
- 法務省 (2019) 「平成 30 年末現在における在留外国人数について」報道発表資料, 法務省ホームページ http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04_00081.html (2019 年 3 月 22 日更新) (閲覧日: 2019 年 6 月 5 日)
- 萬浪絵理 (2016) 「地域日本語教室で「学習支援」と「相互理解」は両立するか: 日本語教育コーディネーターの実践をととした考察」『言語文化教育研究』14, pp.33-54. 言語文化教育研究学会

- 柳田直美 (2019) 「やさしい日本語の使い手を養成する」庵功雄・岩田一成・佐藤琢三・柳田直美 (編) 『やさしい日本語と多文化共生』 第9章, pp.145-159. ココ出版
- ヤン・ジョンヨン (2012) 「地域日本語教育は何を「教育」するのか: 国の政策と日本語教育と定住外国人の三者の理想から」『地域政策研究』 14, pp.37-48. 高崎経済大学地域政策学会
- 横内美保子 (2015) 「対話型活動を活用した「やさしいにほんご講座」—外国人とともに目指す「やさしい日本語」—」『南山大学国際教育センター紀要』 15, pp.1-22. 南山大学国際センター
- 米勢治子 (2010) 「地域日本語教育における人材育成」『日本語教育』 144, pp.61-72. 日本語教育学会
- 和田礼子 (2015) 「熊本方言要素の抽出と分類—談話資料にどのようなタグを付したか—」『2010-2013 年度地域社会に順応するための「気付かれない方言」教材の作成とその方法論の構築成果報告書』 (研究代表者: 馬場良二) 基盤研究 (B) 一般 課題番号 22320096-1